

漢字字体規範データベース (HNG) の活用

漢字字体と文献の性格

石塚晴通, 池田証寿, 高田智和*, 岡墻裕剛, 齋木正直
北海道大学 *国立国語研究所

漢字字体の各時代・各地域の標準と、その変遷を見る上では、漢字字体規範データベース(略称 HNG)は有用な資料である。HNG は、初唐標準字体に至る中国南北朝・隋文献における標準字体の存在と中国周辺民族の漢字文献における標準字体を示し、また日本上代から近世初期に至る漢字文献における漢字字体を示す。HNG はそれ自体としては確固たる結論には結びつかないが、発展性のあるテーマの観点を示し得ることを、親鸞の著作と明恵の著作との対比を例として述べる。

Practical use of the Hanzi Normative Glyphs (HNG) database: standard of writing and character of texts

Ishizuka Harumichi, Ikeda Shōju, Takada Tomokazu*, Okagaki Hiroataka, Saiki Masanao
Hokkaido University *National Institute for Japanese Language and Linguistics

The 'Database of the Normative Glyphs in Hanzi Script' (abbreviated as HNG) is a useful tool for observing the standard of writing in each time period and geographical regions. In the HNG database, we now have shown the standard of writing in texts of the Nanbeichao, the Sui and early Tang dynasties; the standard in Chinese language material written by the non-Chinese peoples around China; as well as the standard in Chinese language manuscripts written in Japan, starting from earliest times to the beginning of the modern era. Furthermore, since the HNG database in itself does not offer any particular conclusions, the author suggests possible research topics, such as the comparison of Shinran and Myōe manuscripts, as examples for a meaningful application of data.

1. 漢字字体規範データベース (HNG)

1.1. データベースの概要

漢字字体の各時代・各地域の標準とその変遷を観察する上で、漢字字体規範データベース (Hanzi Normative Glyphs, 略称 HNG) は有用な資料である。HNG は代表者である石塚が長年にわたって蓄積してきた「石塚漢字字体資料」(紙カード 79 文献約 50 万字)を基礎として、北海道大学言語情報学講座有志が協力して作成し、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の支援と技術によって 2004 年度から公開している。HNG は、初唐標準字体に至る中国南北朝・隋文献における標準字体の存在と中国周辺民族の漢字文献における標準字体を示し、また日本上代から近世初期に至る漢字文献における漢字字体を示す。公開文献は、2009 年度末現在、漢籍・仏典・国書等 64 文献に及び。漢字文化圏全域の幅広い時代の資料を検索できる、他に類を見ないデータベースである。

1.2. 検索方法

HNG (<http://joao-roiz.jp/HNG/>) の検索画面は図 1 の通りであり、検索対象と異体率上限とからなるシンプルな構成である。

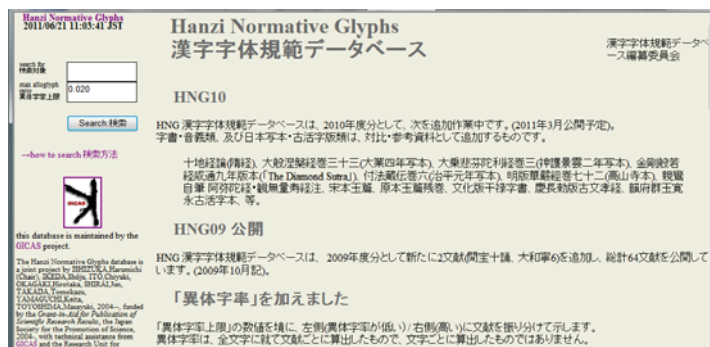


図 1 HNG の検索画面

漢字の検索は、各種の指定法に対応している。

- (1) 漢字・漢字の列 漢字それ自体 字，學而，弁辨辯辨 (文字列は単字に分解して検索)
- (2) 『大字典』番号 D 数字 D2267 (字)
- (3) 諸橋『大漢和辞典』番号 M 数字 M6942 (字)
- (4) 部首 R 部首番号，R 部首字，R 字 R140，R 艸，R 花 (いずれも 140 番「艸」部の意)
D/M/R を付けない数字は，1~214 ならば部首番号，215 以上は大字典番号と見なす。

漢字・漢字の列は，文字列を単字に分解して検索するので，検索したい漢字を複数指定して結果を表示できる。また，異体字検索にも対応しているので，例えば，「龍」と「竜」とを単独で検索しても，また「龍竜」と複数指定しても，同じ結果が得られる。検索は Unicode (拡張 A,B まで) に対応している。

部首の検索・表示は，部首順に配列した別の調査資料と比較する際に便利である。図 2 に「R 龍」と指定して検索した結果を例に示す。

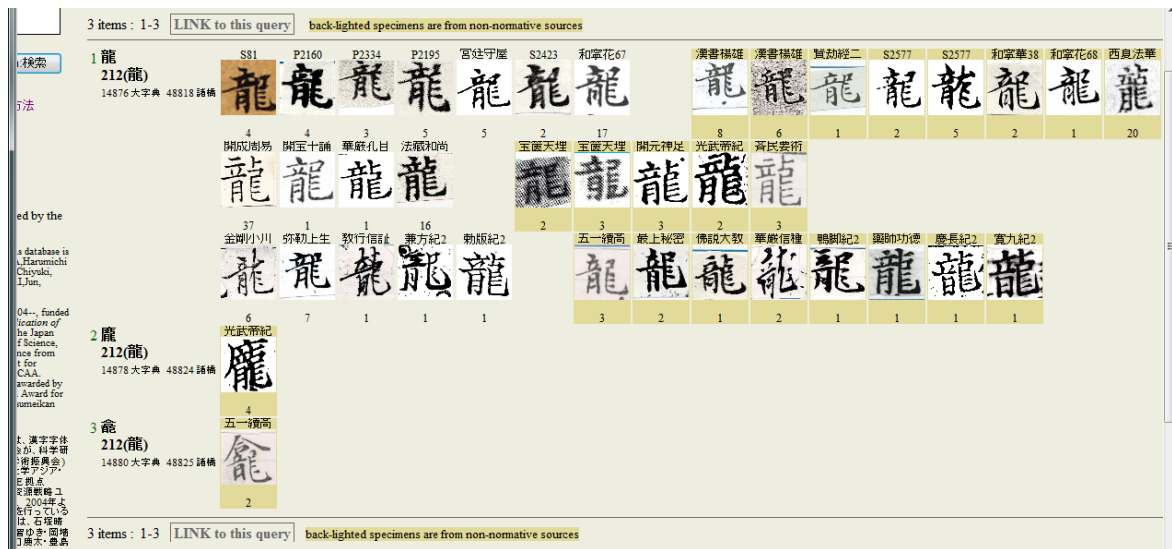


図 2 「R 龍」の検索結果

図 2 によると，HNG では「龍」か，それに近い字体が使用されており，現代の通行の字体である「竜」は使用されていないことが分かる。「龍」の検索結果の第一段目には中国写本および中国周辺写本・版本が配され，第二段目には中国開成石経・宋版が配される。第三段目には日本写本・版本が配される。この例では該当がないが，第四段目には韓国写本・版本が配される。

第一段目の一番左側「龍」の画像の上に S81 とあるのは HNG の文献名の略称であり，大英図書館所蔵スライム将来敦煌本の S81 大般涅槃経巻第十一 (506 年書写) であることを示す (文献名の一覧は後掲の表を参照)。画像の下に 4 とあるのはこの字体の用例数である。図 3 に S81 「龍」字の用例カードを示す (未公開)。

部首番号： 字体数：1
212 用例数：4

龍

大字典番号： **龍 龍 龍 龍**
14876

図 3 用例カードの例

検索結果画面 (図 2) の右側に配され，文献名と用例数がハイライト表示となっているのは，異体率が高い，非標準的文献とその漢字字体である。第一段目の 漢書楊雄 では「龍」の左上部分を「立」とするのが 8 例，「丘」とするのが 6 例見える。

2. 異体率と文献の性格

2.1. 字体変遷モデル

HNG を活用するには、漢字字体は各時代・各地域によって標準が存在し、その標準の変遷することを証明するために、石塚漢字字体資料が作成されたことに留意することが必要である。

中国の初唐（618-712）における漢字字体の標準が存在し、その標準が晩唐の開成石経（837）で大きく変化したものとなり、それが宋版で定着し、一方日本では初唐の標準字体を日本の標準字体として定着させ、中国の字体の標準が変わっても基本的には近世の活字印刷文化の開始まで維持したとする[1]。図4はこのモデルを図示したものである。

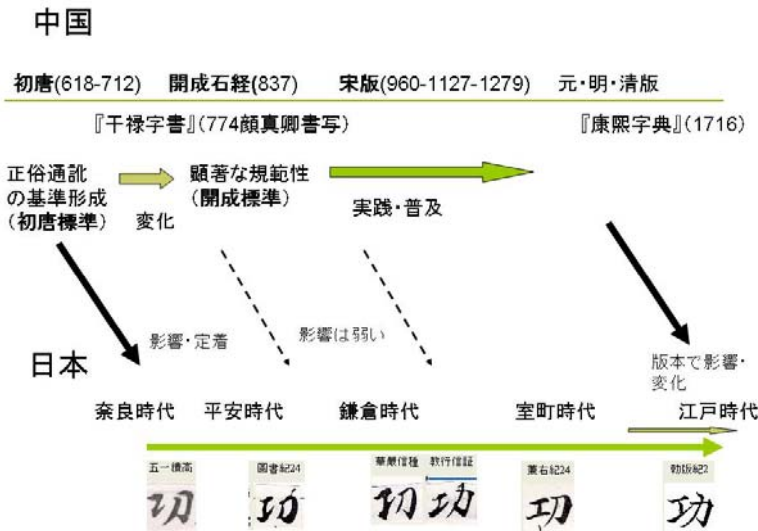


図4 HNG字体変遷モデル

2.2. 異体率

標準的文献には確かな字体標準が存し、それは異体率（異体字率）によって明示可能であり、次の式で算出する。

$$\text{異体率} = \text{異体の総字数} / (\text{文献の総字数} - \text{孤例の総字数}) \times 100$$

異体率は漢字を複数回書く時に字体がゆれる割合であり、「異体」は字体のゆれのある字のうち、使用数の少ない方の字体である。「孤例」は各文献で1用例しか出現せず字体のゆれを把握できないため総字数から除く。

例えば開成石経論語は、文献の総字数 14,325 字から孤例の総字数 469 字を除いた 13,856 字のうち、異体の総字数は 5 字であって、異体率は 0.03%と算出され、字体の規範性が顕著であることが理解される。文献が標準的かどうかの基準は異体率 1.00%が目安となる。私的文献では異体率が高くなっており、異体率と書誌データの傾向とは相関する[2][3]。

3. 各時代・各地域の標準的文献

3.1. 公開文献の一覧

公開中の 64 文献について、通し番号（1～64）、資料名（作成年代）、略称、異体率を次ページ以下の表に示す。

- 中国写本（1～17）及び中国周辺写刊本（18～24）
- 中国開成石経・宋版（25～37）
- 日本写刊本（36～51）及び日本書紀写刊本(52～60)
- 韓国写刊本（61～64）

図2で説明したように、HNGの検索結果は、この4区分の順に従って表示される。

表 HNG 引用文献一覧

no	分類	資料名(作成年代)	略称	異体率	全体	異体
1	南北朝写本	S81 大般涅槃經卷十一(506)	S81	0.87%	928 字種 959 字体 6,661 字	58 字
2	"	S2067 華嚴經卷十六(513)	S2067	0.49%	629 字種 643 字体 7,528 字	37 字
3	"	P2179 誠実論卷八(514)	P2179	0.65%	556 字種 565 字体 6,138 字	40 字
4	"	P2160 摩訶摩耶經卷上(586)	P2160	0.90%	1,046 字種 1,088 字体 6,008 字	54 字
5	隋写本	P2413 大樓炭經卷三(589)	P2413	1.06%	547 字種 574 字体 4,626 字	49 字
6	"	隋經賢劫經卷二(610)	賢劫經二	1.11%	884 字種 927 字体 7,762 字	86 字
7	"	P2334 妙法蓮華經卷五(617)	P2334	0.41%	632 字種 647 字体 5,672 字	23 字
8	初唐写本	今西本妙法蓮華經卷五(671)	宮廷今西	0.64%	633 字種 645 字体 4,344 字	28 字
9	"	P2195 妙法蓮華經卷六(675)	P2195	0.58%	612 字種 620 字体 4,371 字	24 字
10	"	守屋本妙法蓮華經卷三(675)	宮廷守屋	0.81%	585 字種 592 字体 5,685 字	46 字
11	"	S2577 妙法蓮華經卷八(7C 末)	S2577	2.03%	780 字種 823 字体 5,605 字	114 字
12	"	上野本漢書楊雄伝(初唐)	漢書楊雄	4.57%	1,573 字種 1,701 字体 4,510 字	206 字
13	則天写本	守屋本花嚴經卷八(則天期)	花嚴守屋	1.24%	443 字種 467 字体 5,166 字	64 字
14	盛唐写本	S2423 瑜伽法鏡經(712)	S2423	0.89%	939 字種 965 字体 7,733 字	69 字
15	"	唐經四分律卷第二十(740頃)	正四分 20	0.71%	430 字種 458 字体 9,875 字	69 字
16	"	阿毘達磨大毘婆沙論卷百七十(8C 初)	正毘 170	2.46%	169 字種 196 字体 6,366 字	156 字
17	"	阿毘達磨大毘婆沙論卷百七十八(8C 初)	正毘 178	1.88%	646 字種 685 字体 6,133 字	111 字
18	高昌写本	大品經卷二十八(高昌期)	京博大品	0.13%	271 字種 273 字体 1,547 字	2 字
19	吐蕃写本	S5309 瑜伽師地論卷三十(857)	S5309	2.97%	709 字種 800 字体 7,499 字	223 字
20	大和寧写本	花嚴經卷三十八(9-10C)	和寧花 38	1.29%	590 字種 620 字体 7,066 字	91 字
21	"	守屋本花嚴經卷六十七(9-10C)	和寧花 67	1.02%	852 字種 899 字体 9,975 字	99 字
22	"	守屋本花嚴經卷六十八(9-10C)	和寧花 68	1.25%	801 字種 828 字体 7,245 字	87 字
23	"	書道博本花嚴經卷六(9-10C)	和寧花 6	1.19%	472 字種 491 字体 6,832 字	80 字
24	西夏版	妙法蓮華經卷一(1149)	西夏法華	1.55%	834 字種 893 字体 9,085 字	141 字
25	開成石經	論語(837)	開成論語	0.03%	1,322 字種 1,328 字体 14,325 字	5 字
26	"	周易(837)	開成周易	0.18%	1,404 字種 1,420 字体 23,248 字	43 字
27	"	孝經(837)	開成孝經	0.00%	478 字種 478 字体 1,967 字	0 字
33	北宋版	開寶藏十誦律卷四十六(974)	開寶十誦	0.35%	571 字種 588 字体 7,600 字	26 字
32	"	宝篋印陀羅尼經(970年代)	宝篋天理	4.41%	615 字種 679 字体 2,621 字	107 字

28	"	東禪寺版阿毘達磨大毘婆沙論卷百七(1100)	東禪毘婆	0.60%	357字種 368字体 6,979字	42字
29	"	開元寺版道神足無極變化經卷四(1126)	開元神足	1.03%	674字種 692字体 5,528字	57字
30	"	通典卷一(11C)	通典卷一	0.88%	1,126字種 1,147字体 6,483字	57字
31	"	齊民要術卷五(12C初)	齊民要術	1.78%	994字種 1,051字体 5,464字	97字
34	"	金剛般若經(北宋期?)	京博金般	0.64%	442字種 449字体 5,414字	34字
35	南宋版	華嚴經內章門等雜孔目卷一(1146)	華嚴孔目	0.63%	779字種 814字体 16,967字	107字
36	"	法藏和尚伝(1149)	法藏和尚	0.76%	1,577字種 1,613字体 6,967字	53字
37	"	後漢書光武帝紀(1198)	光武帝紀	0.80%	1,192字種 1,225字体 6,622字	53字
38	日本写本	小川本金剛場陀羅尼經(686)	金剛小川	0.29%	501字種 509字体 6,118字	18字
39	"	和銅經大般若經卷二百五十(712)	和銅 250	0.13%	161字種 166字体 7,476字	10字
40	"	高山寺本弥勒上生經(738)	弥勒上生	0.74%	587字種 605字体 3,523字	26字
41	"	守屋本五月一日經統高僧伝(740)	五一續高	1.45%	1400字種 1,463字体 5,928字	86字
42	"	五月一日經四分律卷第十六(740頃)	正四分 16	0.97%	436字種 469字体 9,824字	94字
43	"	高山寺本大教王經卷一(815)	金剛大教	0.78%	495字種 508字体 6,645字	52字
44	"	金剛大教王經卷第二(12C初)	院政大教	1.76%	457字種 493字体 5,711字	98字
45	"	東禪寺版写大教王經卷一(12C)	佛說大教	2.75%	794字種 845字体 4,291字	118字
46	"	東禪寺版写最上秘密那拏天經(12C)	最上秘密	3.63%	435字種 466字体 2,853字	64字
47	"	明恵自筆華嚴信種義(1221)	華嚴信種	1.07%	633字種 651字体 6,262字	67字
48	"	親鸞自筆教行信証卷四(1224)	教行信証	0.89%	612字種 633字体 6,149字	55字
49	日本版本	寛治二年刊本成唯識論卷十(1088)	成唯識 10	1.41%	467字種 490字体 7,290字	103字
50	"	春日版大般若經卷八十(13C)	春日般若	0.45%	374字種 380字体 7,677字	34字
51	"	守屋本薬師功德經(1412)	薬師功德	2.37%	832字種 884字体 4,927字	109字
52	日本書紀写本	岩崎本卷二十四(10C)	岩崎紀 24	2.15%	1,099字種 1,173字体 5,401字	116字
53	"	図書寮本卷二十四(1142頃)	圖書紀 24	1.77%	1,079字種 1,147字体 5,260字	93字
54	"	鴨脚本卷二(1236)	鴨脚紀 2	3.04%	1,090字種 1,168字体 8,805字	257字
55	"	兼方本卷二(1286)	兼方紀 2	0.55%	1,143字種 1,166字体 10,006字	55字
56	"	兼右本卷二十四(1540)	兼右紀 24	1.88%	1,098字種 1,157字体 5,425字	102字
57	日本書紀版本	慶長勅版卷二(1599)	勅版紀 2	0.66%	1,141字種 1,163字体 9,920字	65字
58	"	慶長十五年版卷二(1610)	慶長紀 2	2.82%	1,140字種 1,228字体 9,998字	282字
59	"	寛文九年版卷二十四(1669)	寛九紀 24	2.74%	1,091字種 1,178字体 5,429字	149字
60	"	寛文九年版卷二(1669)	寛九紀 2	2.82%	1,140字種 1,256字体 10,021字	283字
61	韓国写本	新羅本花嚴經卷八(754-755)	花嚴新羅	0.35%	471字種 481字体 6,539字	23字

62	韓国印刷本	晋本華嚴經卷二十 (10C)	古麗華 20	0.46%	457 字種 476 字体 7,682 字	35 字
63	"	高麗初彫本瑜伽師地論卷五 (11C)	初麗瑜 5	0.89%	598 字種 610 字体 6,188 字	55 字
64	"	高麗再彫本華嚴經卷六 (13C)	再麗華 6	0.06%	490 字種 494 字体 8,063 字	5 字

長安宮廷写経 (8~10) をはじめとする多くの文献は異体率 1.00%以下であり標準的な文献である。

漢書楊雄 S2577 S5309 等の非標準的文献 (私的文献, 学習テキスト) は高い異体率を示すが, 字体の標準を見るために収録している。

3. 2. HNG 所収の標準的文献の原本画像の例

HNG 所収の標準的文献は大半が著名なものである。その原本画像がインターネットで公開されている例も少なくない。図 5 は 宮廷守屋, 図 6 は 開成孝経, 図 7 は S5309, 図 8 は 岩崎紀 24 であり, いずれも公開画像から転載した。

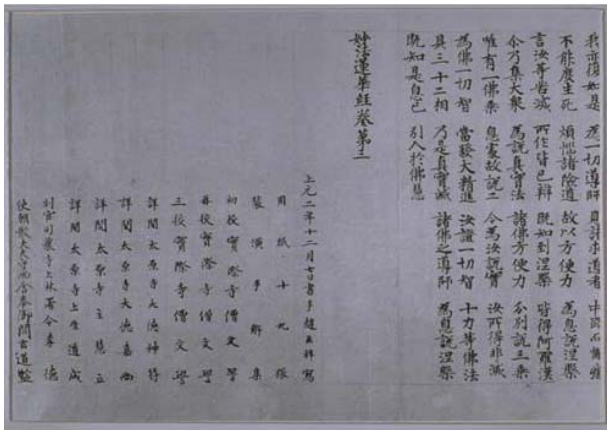


図 5 守屋本妙法蓮華経卷三 (京都国立博物館所蔵) <http://www.kyohaku.go.jp/jp/syuzou/index.html>

図 6 開成孝経 (京都大学人文研所蔵拓本) <http://coe21.zinbun.kyoto-u.ac.jp/djvuchar>

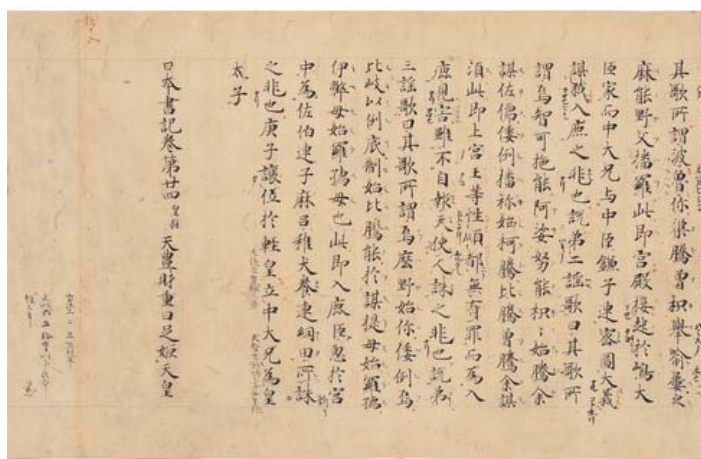


図 7 S5309 (大英図書館所蔵 IDP) <http://idp.bl.uk>

図 8 岩崎本日本書紀卷二十四 (京都国立博物館所蔵) <http://www.kyohaku.go.jp/jp/syuzou/index.html>

4. 初唐の標準字体と開成石経の標準字体

4. 1. 初唐の標準字体と開成石経の標準字体との相違

初唐の宮廷写経の字体と晩唐の開成石経の字体とが相違する典型例として, 「来・功・為」の 3 文字を指摘できる。宮廷写経は「来・功・為」を、開成石経は「來・功・爲」を使用している。



図9 HNGでの「為」の検索結果

図9はHNGで「為」を検索した結果である。第一段目は中国写本で「為」がほとんどである（西夏法華 1149年は西夏版本）。第二段目は開成石経・宋版で「爲」を使用している（開宝十誦 974年、宝篋天理 970年代が例外）。第三段目は日本写本で「為」が多いが、「爲」も少なくない（教行信証 勅版紀2等7文献）。第四段目は韓国写本で年代の新しい再麗華6が「爲」である以外は「為」を使用する。初唐の標準字体の「為」の使用が開成石経の標準字体「爲」の使用に置き換わって行く様相を観察できる。

「来・功・為」と「来・功・爲」のように、初唐宮廷写経と開成石経とで相違する字体はどれくらいあるのか。開成論語と宮廷写経3種 宮廷今西 宮廷守屋 P2195とを比較すると、次の60字を指摘できる[4]。開成論語 P2195の順に示す。

「事」	「事」	「今」	「今」	「来」	「来」	「切」	「切」	「前」	「前」
「功」	「功」	「勝」	「勝」	「周」	「周」	「國」	「國」	「土」	「土」
「安」	「安」	「定」	「定」	「賞」	「賞」	「尊」	「尊」	「少」	「少」
「師」	「師」	「彌」	「弥」	「後」	「後」	「從」	「從」	「復」	「復」
「微」	「微」	「德」	「德」	「恒」	「恒」	「惡」	「惡」	「成」	「成」
「憂」	「憂」	「所」	「所」	「擊」	「擊」	「敬」	「敬」	「於」	「於」
「既」	「既」	「明」	「明」	「曾」	「曾」	「欲」	「欲」	「歎」	「歎」
「流」	「流」	「清」	「清」	「無」	「无」	「爲」	「為」	「爾」	「尔」
「猶」	「猶」	「甚」	「甚」	「異」	「異」	「發」	「發」	「益」	「益」
「神」	「神」	「禮」	「礼」	「聲」	「聲」	「能」	「能」	「脩」	「脩」
「若」	「若」	「萬」	「万」	「虛」	「虚」	「解」	「解」	「說」	「說」
「譬」	「譬」	「足」	「足」	「難」	「難」	「願」	「願」	「養」	「養」

4.2. 親鸞と明恵

日本の写本・版本は、基本的に初唐の標準に一致する字体を使用する中において鎌倉時代新仏教の親鸞 教行信証 は例外的である。教行信証 では、「来・功・爲」で開成石経・宋版と同じ字体を使用し、初唐の標準字体である「来・功・為」を使用しない。一方、旧仏教の明恵 華嚴信種 では初唐の標準字体「来・功・為」を使用していて対照的である。

教行信証（図10参照）は正式名称を「顯浄土真実教行証文類」と言い、親鸞の自筆本は坂東本と呼ばれるが、それは明治時代まで坂東報恩寺に伝わったことによる。現在は東本願寺に所蔵される。HNGは[6]の影印に基づく。華嚴信種（図11）は承久三年（1221）に明恵が書写したものである[7]。HNGは原本調査及びその画像に基づく。

ここで初唐宮廷写経と開成石経論語とで字体を異にする60字について、教行信証と華嚴信種とでどちらの字体を使用しているかを調査すると次の結果が得られた[5]。

教行信証

「初唐標準」と字体が同じ：9字（前國實成欲流清神聲）

「開成標準」と字体が同じ：23字（今來切功土安定師後從微德所於既爲異盡能說足願養）

その他の字体：12字（勝彌復惡明爾發益若虛解譬）

2字体以上：7字（事敬無禮脩萬餘）

華嚴信種

「初唐標準」と字体が同じ：27字(來切前功勝國土定實師彌從微惡成流爲爾猶甚異若萬虛說願餘)

「開成標準」と字体が同じ：7字(安少德既明普清)

その他の字体：15字(事周尊後復欲發益盡神能脩解譬養)

2字体以上：6字(今所於無聲足)

教行信証 で「開成標準」が多く、華嚴信種 で「初唐標準」が多いことが歴然としている。

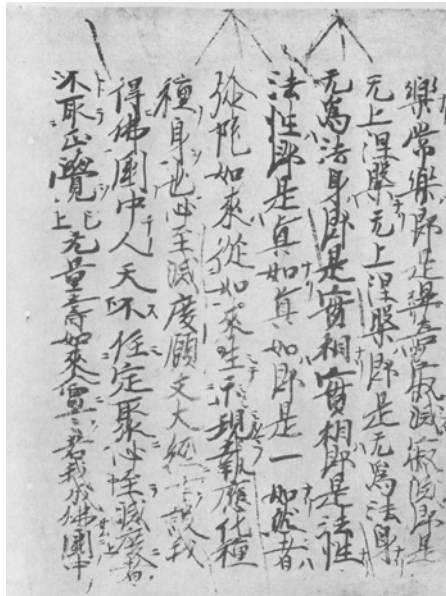


図 10 教行信証 (東本願寺所蔵)

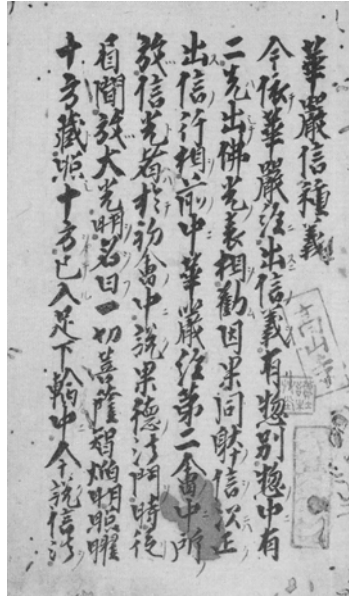


図 11 華嚴信種義 (高山寺所蔵)

4.3. HNG の性格と今後

HNG はそれ自体として確固たる結論には結びつかないが、これを基準として、漢字字体史やテキスト論等で発展性のあるテーマの観点を示すことができる。親鸞 教行信証 等を例として具体的な資料画像を提示しながら文献の性格と漢字字体との関係を解説し、HNG の活用の方法を述べた。

HNG は「石塚漢字字体資料」を土台にするが、この資料は一貫した字体認定の基準によって作成されている。検索システムとしては、通常 HNG 検索結果画面から原文画像に戻る機能を備えることが期待されるが、そのシステムは検索結果を土台にして字体の異同を調査・分析することが目的となる(たとえば「拓本文字データベース」(<http://coe21.zinbun.kyoto-u.ac.jp/djvuchar>)はそのよい例であろう)。これに対して、HNG は、字体認定はすでに終わっており、各時代・各地域の字体の標準を提示することに主眼がある。HNG は近世から近代が手薄であるので、今後はその補充・拡張が課題のひとつであることを述べて締めくくりにする。

参考文献

- [1] 石塚晴通: 漢字字体の日本的標準, 国語と国文学, 76(6), pp.88-96, 1999.
- [2] 石塚晴通・豊島正之・池田証寿・白井純・高田智和・山口慶太: 漢字字体規範データベース, 日本語の研究, 1(4), 日本語学会, pp.94-104, 2005.
- [3] 石塚晴通: 漢字字体規範データベース(HNG)—敦煌写本の位置—, 敦煌・吐魯番出土漢文文書の新研究, 東洋文庫, pp.1-10, 2009.
- [4] 斎木正直・池田証寿: 漢字字体の変遷—HNG に見る変わる字体と変わらない字体—, 計量国語学 27(8), pp.317-328, 2011.
- [5] 斎木正直: 日本における漢字字体標準の形成と推移, 跨文化交际中的日语教育研究 1, 北京: 高等教育出版社, pp.161-162, 2011.
- [6] 赤松俊秀編: 親鸞聖人真蹟集成 1, 法蔵館, 1974.
- [7] 高山寺典籍文書綜合調査団編: 明恵上人資料第五, 東京大学出版会, 2000.